

当院透析室のフットケア 10 年間のあゆみ～透析患者の足を守る

(医) 宝池会 吉川内科小児科病院 透析室

○土屋真奈美 (ツチ マナミ) 早坂幸枝 水野谷幸代 須藤由美 志田梨江 吉川昌男

【背景】

当院は '02 年日本透析医学会に下肢創傷ケアの研究発表を行って以降、フットケアや創傷ケアに取り組んできた。当透析室では大切断例や敗血症による死亡例、都内で血行再建不可能と診断され北海道でバイパス術を受け救肢できた例、通院透析時の局所治療での治癒例、当院入院創処置での治癒例など様々な透析足病変患者のケアを経験した。

【目的】

10 年間の経験を経て '08 年より現在のフットケアのシステム構築を行い、フットケアの充実を図り、足病変の予防と早期発見につなげ透析患者の足を守る。

【方法】

- ①アセスメントシートに沿った観察及び ABI と SPP を測定。9 段階にリスク分類した。同時に各リスクの患者割合を出した。
- ②リスク別に観察間隔を設定。セルフケア能力や既往に応じ定期的フットケアニーズのある患者を選定。フットカルテを作成し実施。
- ③血流評価に基づき治療法や創傷処置、フットケアの内容を選択。

【結果】

- ①低リスク群患者=75 人 (56%) 中等度リスク群=34 人 (25.8%)
高リスク群=23 人 (17.4%) であった。高リスク群の内訳は現在創傷発症者は 3 人。潰瘍既往や切断既往、血行再建を受けた患者は 13 人だった。'09 年～現在まで切断例はなかった。
- ②定期的フットチェックで創傷が発見された患者は 4 人で、何れも発症初期段階で発見し治療につなげられた。
- ③186 名中定期的フットケアを必要とする患者は 42 名 (22.5%) であった。
- ④ '09 年から' 10 年 10 月までに血流評価を受けた患者は 13 名。中 7 人が P T A による血行再建を施行。有創傷者は 1 名でその後の創傷ケアで治癒した。

【考察】

10 年間の経験から今回リスク分類を行い根拠に基づいた観察頻度を設定したことで、創傷の初期段階での発見ができた。システム構築により観察結果を治療やフットケアに活用し、創の重症化を防ぎ切断に至る例はなかった。今後は更に専門医との連携やフットウェア提供、患者教育の強化などトータルに足を治療・サポート出来るシステムの充実を行う必要がある。

【結語】

透析室で看護師がフットチェック・フットケアを行うことで、傷は出来たら治すのではなく傷はつくりたくない予防が透析患者の足を守ることにつながる。